
錬金術のジェネラリスト

深琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術のジエネラリスト

【Nコード】

N4234BA

【作者名】

深琴

【あらすじ】

両親が残してくれた店を手放さない為、助けてくれた人たちの為にも錬金術師になりたい！

異世界ファンタジー物です。トリップや転生ものではありません。異種族として定番エルフ・ドワーフ等も出します。魔法もちろん？青年の成長物語・・・になるといいなあと思いつつ。

初めて書く為稚拙な分ではありますが、楽しんでもらえたらうれしいです。しばしのお時間をいただきつつ、これから頑張っていきたいと思います。

0 話ブローグ

「よし。これで明日の資格試験の準備は大丈夫のはずだ」

明日の実地試験の為の必要装備・回復アイテム等を、リストと照らし合せながら確認を終らせる。

「この3年なんとか生きて行けたけど、これから先は自分の手に技術をもたないとやっていけないもんな・・・」

今年で数え年18になるテール・アルフォンスは錬金術師の卵である。

錬金術師はポーションから剣の作成等を総合的に開発・販売する職であり、最高峰の資格ジェネラリスト資格試験には毎年多数の応募者がでるのだが、合格者がここ100年で1名という超難関な職である。

「さてと準備の確認も終ったし、早めに寝て体力を温存しようかな」と

待ちに待った錬金術師になる為の資格試験を目前に控え、逸る気持ちを抑えるのも難しいもので布団に入っただが中々寝付けない・・・

「眠気がくるまでちょっとこの時代の事とか振り返ってみよう」

ここアストレル大陸にある一つの街、ここジェイラルは北は人が登れないだろ山があり周りを森に囲まれ魔物が多く生息し、街を

作るにはいささか難しい場所であった。

西には川を挟んで首都イラハールのあるテンドレンタル・南は海に面しており、東には山を隔てて今は休戦状態の戦闘国家とされるオーリスがある。

その微妙な場所に皇帝直属の名誉近衛騎士オウリンが、引退と共に褒美としてこの地を賜り、開拓して小さな村を作ったのが始まりである。

街中央に銅像が建っているのは当たり前かもしれない。この周りは子供たちの遊び場としていつもにぎわっていて笑い声がたえない。過去戦争を起こした戦場の中央に存在しているジェイルスでその当時の戦死者達は何を思うだろう？

テンドレンタルとオーリスは過去何度と無く衝突しているが、オウリンがこの街を起こして以来休戦状態が暗黙の了解となっている。

その場所に強さや富を求めて冒険者が集まり始め、商人が行商をしにこの地を訪れ建物が建ちという具合に少しずつ大きくなっていった。

今では数多くの冒険者の拠点として100年間栄えている街であり、その為各施設（宿屋・武器屋・道具屋・鍛冶屋・魔法雑貨屋・）等が所狭しと並んでいて各々が切磋琢磨しているにぎやかな場所。街の運営は開拓者オウリンが独裁政治を善しとせず、クラン（商工会議所）が各1名ずつ代表者を募り合議制を敷いてる街であり、街自体には大きな争い（いさかい）もなく少しずつ発展してきた。

テールはその街で19年前に産声をあげた。両親は錬金術師の父親と冒険者の魔術師の母親で愛情を持って育てられすくすく成長していった。

小さな万屋を営む父親の工房が遊び場であり、自然と錬金術師になろうと将来の希望をもっていた。

しかし15歳の時、材料調達の為に両親が出かけて行き、そのまま消息を絶ってしまった。

テールは帰りをひたすら待ったが、1ヶ月の搜索の甲斐も無く搜索終了宣言と共に両親の死亡確定が通知された。

遺体の無い葬儀に数多くの慰問者が訪れ、父が母が街の人達に愛されていたのを肌で感じた。

うれしい感情があるとともに、自分も街の人の役に立ち愛される立場になりたいと純粋に願ったのもこの時であり、テールとしての生き方の出発点になってると考えている。

まずは錬金術師として一人立ちするのが今の目標であり将来的にはジエネラリストをめざそう！という希望を密かに考えている。

15 - 17歳までは両親が残してくれた財産と魔物を狩って材料を売り払いながらほそぼそと生活し、限られた時間ではあるが許される限り勉強もやってきた。

助けてくれた周りの人々に感謝しながらの生活で、小さな工房を手放すことなく明日を迎えられそうだ。

「父さん・母さん。俺頑張るから、明日の試験合格するから」

zzz・・・

静かに夜が更けていく

1話 翌日、試験開始（前書き）

さてさてドワーフさん等の異種族を登場させようと思います。
ゆっくりなので先に中々進まないですがご了承の程を・・・

1話 翌日、試験開始

チュンチュン チュンチュン

「ん・・・・・・・・」

小鳥のさえずりで目を覚ます。しかし今日は何でこんなに早く目覚めたのか疑問がでてる。

昨日はいつの間にか寝ていたみたいだけど、寝覚めは思ったほど良くない。

もぞもぞと布団から起き上がろうとするがボクはすぐぶる朝が弱いだ。

「もうちょっとだけ寝かせて」

誰も起こすものの居ない部屋で一人言葉を発する。このまどろみは至福のときだよねえと、意識を手放そうとする自分がいた。

ふと時計が目についた。寝ぼけたままの頭でぼんやりと見てみると、8時をさしていた。

「8時かぁ。だいぶん早く目が覚めたな。何でこんなに早く目が覚めることってないのにな」

問題発言である。今日は何の日かすっかり忘れているテール。

「って今日は試験があるから起きないとだめじゃないか！」

とたんに意識が覚醒する。この18年間で初めて早く起きたかもしれない・・・・・・・・。

試験開始時間は10時からだから着替えて・朝ごはん食べてたら時間足りないかも……。

「まずい。すぐ支度しないと!!」

あわてて井戸まで駆けつけ井戸水で顔を洗い準備に追われる羽目になる。

装備類は昨日のうちに準備していたのが幸いだった。確認までの時間は自己最速だったことはいうまでもないかも。

「あいつはなにやっとなるんじゃ!試験時間の30分前には到着しとけというたのに!!!」

試験官のドワーフのレンドルフは、イライラしながら試験会場であるイレエヌの森の入り口に仁王立ちしていた。

レンドルフはこの街でテールの万屋の隣で鍛冶屋を営み、評議会メンバーの一人でもある人物でもある。簡単に言えば重鎮ですね。年齢400歳を越える元気なおじいちゃん。(本人に言えばハンマーで追いかけられる事請け合い)

ドワーフ・エルフ・精霊等の幻想種族は少数民族ながらここアストレル大陸で生活の基盤を作っている。人よりもはるかに長い寿命を持つ種族たちであり、基本隠れ里で生活して人との関わり合いを持っていなかったが、100年の間に好奇心の強い者達が人と一緒に生活するようになっていた。

このドワーフのレンドルフも30年前に好奇心に勝てず、ここジェイラルにて生活を始めた変わり者でもある。

「はあはあはあ・すいません。遅れました」

息を切らせながらテールが走ってくる。髪はぼさばさで寝癖まで装備している。完全に寝坊だとばれる仕様である。

レンドルフのこめかみに怒りマークが浮かび上がる。イライラの沸点が最高潮。

「このばかもんが……！大事な日だというのにお前というやつは――――！！」

「そんなに怒ると血管が切れますよ」とは心の中でおもっだけのテールである。言葉にだしたらミンチにされるかもしれない（泣き）。

「たくお主の将来がかかっている試験じゃろうに、これで遅刻なぞしておつたらそれこそ路頭にまよふところじゃぞ」

「ご・ごめんなさい。反省します・・・」

しよぼぐんとするテールを見てレンドルフも溜飲を下げる。

「反省もしておるようじゃし、試験内容をいうぞ！」

「はい。よろしくおねがいします」

「本当はダンジョンに入ってもらった予定じゃったが、崩落があつての。イレエヌの森に変更となった。課題は鉱石の発見とそれに伴う武器製作が課題じゃ。お前も錬金術師の卵じゃから鉱石発見の特殊スキルはもつとるじゃろ？それを今回は使つて埋めてある鉱石を見つけて、錬金を行なう。簡単じゃろ？」

ただし！鉱石は下級・中級と埋めてあるものは様々じゃ。どれだけ

目が肥えてるかも課題じゃからしつかりな」

「ふむふむ。まずは鉱石発見を使い鉱石を探し出すと。それで鉱石は良い物・悪い物があつて、しつかりと吟味しないとだめと言うこと。最後に錬金で剣を作製して課題提出でいいのか」

声に出しながら確認をこめてレンドルフの目を見る。間違いはなさそうかな。

「そろそろ時間じゃ。しつかりな。ではこれから試験を始める開始！」

開始の合図を聞き深呼吸をしてイレヌの森に入る。この森は弱いながら魔物もいる。初級者の冒険者の腕試しや駆け出しの人用みたいな場所だ。自分もだいぶこの森に通い詰めた経験があるので、魔物の種類などは把握しているはず。ちょっと自信ないけどね・・・。

開始から10分辺りで止まり辺りを見回す。魔物の気配は今の所ないみたいだ。ここで一度調べておくのが正解かもしれない。

「サーチ」

錬金術師の固有スキル鉱石発見を使つてみる。魔法と呼ばれる神の啓示。その身に魔力を保有するものはこの世界には多く存在する。魔法は生活には欠かせないありがたい存在なのだ。

戦争の道具にもされてるから特にソーサラー（魔術師）の需要は高い。

自分自身も母親の血を受け継いでいる為、少なくとも魔力をこの身にやどしている。実感は使うまではなかったけどね。

ぼうと赤く光る物が1点あるのを確認する。ここ半径10m以内に

はその1箇所のみみたいだ。

「赤色か……。あんまり質のいい鉱石じゃないかな」

このサーチの特徴としては質の良い鉱石は発光する色が変わる。金
> 銀 > 青 > 緑 > 黄色 > 赤という具合に。

錬金術師の固有魔法である為、自分にとっては役に立つというかわ
れしか使えないんだけどね……

「時間はまだあるし範囲を広げてもつと奥までみてみよう入り組ん
でて最奥はむずかしいかもだけど……」

独り言を言いながら奥へと進む。もちろん魔物は何時来るかわから
ないので警戒しながらだけど、これがまた大変きつい。集中力がど
こまで持つのが勝負の分かれ目かもしれない。

草を掻き分けながら、たまに調査に使える野草や実を見つけては確
保していく。鉱石みつけるよ……

「お・黄色の反応があるな。これがいいかも」

少し反応は弱いけど、見つけた鉱石の中ではだいぶましな部類に入
ると思う。

「ここまでかった時間はつと……。げ・1時間越えてる。錬金
に時間取りたいしこの辺りでやめておくかな」

ふと頭の中によぎるものがある。本当にこの程度の鉱石で良いのか
と。本当にこれで良いのかと。

「だめだ。これで満足してたらその程度で終わってしまう。僕はその先を見据えているんだろ……。納得するまで探さなきゃ」

そう思いなおして再確認する。まだ時間はある！と。時間の許す限り探索に費やすぞ。

タイムリミットまで後3時間……

2話 試験中、資格取得？（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

のんびりした進み具合なので軽い気持ちで読んでいただけるとうれ
しいです。

2話 試験中ゝ資格取得？

うつそうと茂る森の中。

試験中ながら納得するまで探索を続けているテールは、集中力を切らし始めていた。

「ふう。かなり探し周ったけどこれだ！っていう鉱石は見付かってないな。時間はつと・・・まずい！もうリミット30分切ってるじゃないか！！。どうしよう・・・。」

頭の中の考えがごちゃごちゃになってしまい、周りからの意識を手放してしまう。

少なくとも魔物が居るこの場所で、空白の時間が出来るのは死につながる場合が多くある。

「ギャウウウウー！！」

「グッ・・・はなせええええ！」

突然の痛みに大声をあげてしまった。鋭い痛みが脳に直接響いてくる。今もなお牙がめり込む太ももからその物体は離れようとせず食いついたままだ。

「離せ・はなせよー！！！！」

自分の叫び声が辺りにこだまする。痛みと恐怖で行動がめちやくちやになり、ただその噛み千切られるかという恐怖と痛みに混乱に拍車をかける。

「ギャウン」

「ウツ」

やみくもに振った手がその物体当たったとき、泣き声と共に太ももから圧力が緩んだ感じが伝わってきた。

「くっ。いて~~~~！」

痛みに転げまわりそうになりながら、混乱する中太ももを見ると噛みつかれた歯型から血が溢れている。この血を見て逆に冷静な感情が芽生えてきた。襲ってきた物体とその周りを確認する。

「痛みで気絶しなかったただけましかな……。この幸運に感謝しないと」

「グル・グルルウ」

しまった。いつの間にかサーフウルフ2体が、獲物と定め臨戦態勢に入っているのが肌で感じるほどわかった。

「この森には生息してないはずの魔物がなんでいるんだ……。？」

自分が知らないだけなのだろうか？。何度と無くこの森に入り探索してきたテールはその言葉を飲み込む。

左ふともからは未だ血が流れている。深くかまれすぎたみたいで、止血したい所だけどそんな状況に今はない。許してもらえない。魔物は自分の命を消そうとしているのだから……。

「こいよ！。命のやりとりは覚悟してるけど、まだ死ぬわけには
いかないんだよ・・・」

手負いの為動きが鈍いのは仕方が無い。それでも他の洞窟で対峙し
て、倒した経験は数え切れないほどある。

愛用のバトルハンマーを握り締めながら、近づいてくるのを待つ。
叩き潰す・殴り殺す事を目的としたハンマーは迎撃に都合がいい。
こちらから攻撃に向かえば不利になる事が多い

「ぎやうううう！」

「おりゃあああああ！。まずは1体！！！」

飛び掛ってきたサーウルフの急所の眉間に当たってくれた。迎撃に
成功して空中に居た魔物は絶命して地面に落ちた。倒した魔物から
黒い瘴気が立ち上り、魔石と呼ばれる加工材料がその場に残り跡形
も無くその姿が消えていく。しかしそんな余裕も今は無い。

「2体同時になんて相手できるかよーー！」

そうもう1体が左ふくらはぎに牙を付き立てていた。焼けるような
痛みをこらえて魔物を殴り飛ばす。叩き潰す事しか頭にはなかった。
よろけている魔物に追撃の為にハンマーを振り下ろす。2回・3回・
4回・・・

気付いたら魔石が転がっていた。

「手当てしないと・・・死ぬかな」

木にもたれかかり用意していた傷薬をバックから取り出し布にしみ
こませ、傷口にあてる。冒険者御用達の傷薬で効果は十分のはず。

（用意していてよかった・・・。）

自作ながら魔力をこめた傷薬が徐々に浸透していくのがわかる。痛みが引くのはまだ先かな。

完全に傷を回復するような薬品はこの地には存在していない。作れるかもしれないが未だそのレシピは公開されていない。作れば店の看板商品になるかもしれないけど・・・

まあ神聖魔法と呼ばれる治癒魔法ならその効果は絶大だけど、自分には使えないしね。

なにげなく辺りを見回した時に黄色に発光する場所を見つける。強い輝きが目に入った

「これが当たりかな・・・。大変だったけどあきらめなくて良かったかも」

痛む左足を引きずりながらその場所に向かい掘り起こす。質の良い真つ黒な鉱石だ。見たことがない鉱石だと首を傾げつつ。

「っと、感動してる場合じゃないや。時間時間っと・・・。まずい、戻って製作の時間が1時間しかない！急いで戻らないと・・・」

「後1時間半だがあやつ戻ってくるのがおそいの。ワシは監督のみじやから介入するわけにもいかんし・・・」

レンドルは森の入り口で静かにテールが戻ってくるのを待っていた。試験を受ける者は大体1時間で探索を終えて、残りの時間を錬金に力を入れるものが常識とされていた。そう下級鉱石でも出来た武器の良さで合格できる者が多いのだ。

「も・もどりました〜」

左足を庇いふらとした足取りでテールが森の入り口まで戻ってきた。よく見ると血を吸って黒くなったズボンをはいている。

「どうしたんじゃ！まさか魔物に遅れをとったのか？」

「この森に居ないはずのサーフウルフの2体と戦闘になりました。これが証拠の魔石です・・」

そんな馬鹿なと思いつつも、テールが差し出してきた魔石を手に持ち鑑定してみる。

鈍く光る魔石を注意深く眺めていた。

「.....」

「これは確かにサーウルフの魔石じゃな。しかしこんな初級森にいるはずないんじゃが、上に報告する事がふえたのう」

あせりの表情を隠しながらレンドルフはため息をついた。未来の有る若き錬金術師の卵を失わなくて良かったと安堵とともに・・・

「ほれ、時間もせまっておることじゃし錬金にはいるのじゃ。不足の事態があっても試験は試験じゃからの。」

「おに〜・あくま〜・人でなし〜」

「ワシはドワーフじゃから人ではないのう」

文句を言ってもはじまらないか。急いで武器を製作しないと。集

中しなければ錬金は成功しない。
落ち着くまで無言でただ一人の受験者の為に作られた簡易作業台の
前に腰を下ろす。

1分・2分・3分・・・よし！

最後に獲得した鉱石を取り出し、簡易作業台に併設されている炉に
鉱石を放り込む。

徐々に真っ赤になる鉱石を見ながら、試験前より考えていた短刀の
出来上がりを頭に思い浮かべる。

真っ赤になった鉱石を慎重に取り出し、父親が大事にしていた作業
ハンマーを手に握る。

（いくぞ。われの望む型に刃をなせ。思い浮かべるは漆黒の刃。）

魔力を込めハンマーを振り下ろす。何度も何度も振り下ろされる度、
鉱石が徐々に薄く自分の思い浮かべる物になっていく。この工程が
作業を行なう中でテールの一番好きな時間だった。

「ふう。できた！」

まだ熱い短剣を冷却する為水につける。

ジュワッと水分が蒸発し白い煙が立ち昇るのを見て取り出し日差し
にかざす。真っ黒な刀身が鈍く光る。

テールは汗をぬぐい試験官であるレンドルフにその短剣を手渡す。

「時間ぎりぎりでしたけど、自分の中で精一杯作ったものです。よ
ろしくおねがいします！」

しげしげと短剣を確認しながら、レンドルフは声に出せない驚きを

もって眺めていた。

（これは短時間で初級錬金術師が作る代物じゃないぞ。こやつが正しく成長すればワシでも追いつけない高みに登るかもしれん。）

「よし試験は終了じゃ。よく頑張ったの。合否は2日後に知らせるのでそれまで待機じゃ。体力も限界じゃろうし、まずは医者と所で傷を見てもらえ。なに試験での負傷はクラン持ちじゃからしばいするな！」

テールは張り詰めていた緊張の糸が切れてしまい、レンドルフの言葉を聞きながら意識を手放してしまうことになり、レンドルフに担がれて医者所に放り込まれてしまう。目を覚めたのは翌日の昼間だったのは愛嬌ということ。

「ただいま〜と。相変わらず品物がないな……。試験結果は今日発表のはずだし、とりあえず掃除をして待つかな」

自宅に帰ってきたテールは独り言を言いながら掃除用具を取り出し、窓と入り口を開けて掃除を開始する。サボりすぎてホコリが乱舞してる……

店の前の掃除をしていると近くに影がさした。日差しがまぶしい為、目を細めながらその影を見る。

「ごめんなさい。ここは工房か何かですか？」

影の人物が声を発する。涼やかな音色にも聞こえる声にぱーっと見つめてしまう。

エルフだ。耳が長く身長も高い、顔は整ってて、うん美人さんだ。胸は・・・見なかったことにしておこう。まっさかりだもの仕方が無いと思う。ごめんなさい。

「なにか邪悪な視線を感じるのですが、失礼な事考えていませんか？」

やばい。ものすごくやばい。怒らせたらお店がふつとんじやう。エルフは魔力が他種族と比べ非常に高く、また使える魔法も威力が高い。

ええい、こうなったら状況をうやむやにせねば！！

「すみません。以前は工房を開いていたのですが、今はその資格がありません。今日結果が出るはずなので、その結果次第では開店する事が出来るかと思っています」

「そうですね・・・。上手くごまかされたみたいですけど、まあいいでしょう。時間があるなら少しお話しませんか？」

（人と関わり合いを極端に避けるエルフなはずなのに。珍しいことでもあるものだ。というか貴重な体験かも？）

胸をなでおろしつつそんな事を考えている。意外と楽観的な所があるテール。

「おい。テール。」

向こうの通りから走ってくる女の子の声を聞きそちらの方に目を向ける。エルフのおねえさんごめんなさい。

「ふうふう。っとテールお疲れ様。合否の通知気になってると思うから一番で持ってきたよ。感謝しなさい!!」

ポニーテールが特徴の元気な女の子。

こちらはかわいいとされる顔立ちで俺の幼馴染であるリュツカ・アルハート。

今は合議会議所の事務を担当していて日々忙しいみたいだ。

以前はよく遊んだものだけど、年齢を重ねるごとに遊ぶ事はなくなっていて、道で会っても話して終わりみたいな関係になっていた。

ちなみに胸は大きい。メロンが二つ・・・ありがたやゝ・ありがたやゝ

事務所でも人気があるらしく、告白が絶えないとかなんとか風のうわさで聞いた気がする。

はいごめんなさい・・・反省します。

「リュツカわざわざありがとう。でもよかったの？まだ仕事中だろう？」

「ううん。これも仕事だって、早くもっていきーって上司に言われたからだいじょうぶだよ!」

合否通知を手渡ししながらニコつと笑う。か・かわいい
気を取り直して通知書を見つめる。

もらったのは良いのだが正直手が震えてる。

将来がかかった大事な紙だ。すぐにでも確認したいのに中々封をあけられない。

「どうしたの？ぶるぶるしてるけど、早く開けておしえてよう」

せかすような声で興味深深のリユツカは俺の手にある通知書を奪い取り「ビリッ」「え」

「ふむふむ。おゝ大丈夫だったよ！おめでとうこれで正式に錬金術師だねえ。すっかりがんばってね！。あ・この後看板とか配布があるから錬金クランに出頭ってあるから早めにね」

あつという間の出来事に頭がついてこない。（しまったリユツカはこんなやつだった。いつもやりこめられてて頭があがらなかったんだ・・・）

そこに通知の内容が暴露されたのだ。
合格？俺が？店を守る？。

色々な感情が混ざってうまく言葉を発せ無い。しかし徐々にうれしさがこみ上げてきた。リユツカの仕打ちはしょうがないとあきらめながら。

「やった・やったつ・やったあ！！！」

店の前だというのに周りも気にせず、喜びを爆発させる。これが始まりだ！！！！と共に・・・・

あれ？エルフのおねーさんは忘れられてる？

2話 試験中ゝ資格取得？（後書き）

3話目はいかがでしたでしょうか？3話まではプロローグみたいな感じと受け取られるかもしれませんが、ご感想お待ちしております。

3話 開店休業中？（前書き）

開いてくださりありがとうございます。

3話 開店休業中？

「テール・アルフォンス。錬金クランの一員として、日々精進し市民の為に努力を怠らないように。この認定精霊石授与を持ってあなたを錬金術師初級と認めます。受け取りなさい」

クランの代表者である穏やかな中に厳しい雰囲気を漂わせる言葉が部屋の中に響く。

ここは錬金クランの中の資格認定授与式専用の部屋。

今ここにテールは授与の為に跪きながら代表者の言葉をつけていた。

「ありがとうございます。先輩方の努力に恥じないように努めていきたいと思います。」

緊張しながらも間違えないように言葉を紡ぐ。正直胃が痛い……。代表者から精霊石を受け取りその重みを確かめた。クラン所属の証としての大事な物。父親がいつも大事にしていた物。

これからは自分が錬金術師としての第一歩のはじまりだ！

授与式も終わり、エルフのおねさんと約束していた事を思い出し商工会から自分の工房まで歩く。

（あなたの用事が済むまでここで待っていますので、その後時間もらえます？お話したい事がありますので）

そういつて工房にある椅子に座り目を閉じるおねさん。

まだ名前も聞いていないのに……。

追い出せる雰囲気じゃない。（だってこわいもん）

授与式でのやり取りで疲れ果てていたけど、約束は守らないとね。そう思いながら前を向き工房を目指す。

「おめでとう！」「がんばったね！」「なまけるなよ！」「飲みに行くぞ！。おまえのおごりだ！」

街行く人達。お世話になっていた顔見知りの人達から祝福の言葉が次々とかけられた。（あれ？最後はなんか違うんじゃないか？なんで俺がおごるんだ？）

「遅くなりました。お待たせしてすみません。」

謝罪の言葉を言いながら工房の椅子に座ったままのエルフのおねえさんに声をかけた。

「おかえりなさい。大丈夫ですよ。私達は時間の流れが違いますからね。」

ニコツと笑いながらこちらに声をかけてくれる。帰宅の返事が返ってくるのがなかった3年間。久しぶりに聞いた気がして少し鼻の奥がツーンとしてきた。（な・泣いてないんだからね！）

ごまかすように、荷物をしまいに行きお茶も出すのも忘れていたみたいだ。

慌ててお茶の葉を確認する為、閉まってある戸棚から捜し目的のものをを見つける。

「お茶はグリーンティでいいですか？というかこれしかないんですが構いませんか？」

「ありがとうございます。ちょうど喉が渴いてきたので、いただいてもいいでしょうか？」

「りようかいです。すぐ準備するのでもうちよつとまってくださいね」

お湯を沸かし、愛用のコップともう一つの来客用コップを出してお茶をいれて。

「ズ・ズズズ」「……………」

（まずい・会話が無い。だけどこのおねーさん何しにきたんだろう？依頼とか品物を買いに来たわけじゃなさそうだし……）

ぼーっとエルフのおねーさんを見つめる（凝視はしてないよ!?!）その視線に気付いたのかこちらに目を向けコップをテーブルに置き姿勢を正した。

「改めまして私は耳長属のシレン・フルールといいます。シレンと呼んでください。エルフの隠れ里……とこちらでは言われてる村で司祭をやっています。」

あ・名前すら聞いていなかったんだ。しまったなあ商売の基本は情報なのにすっかり忘れてた。
しかも司祭って……相当な人物じゃないのかな？

「ご丁寧に俺はテール……テール・アルフォンスです。この工房を今日から再開した新米の錬金術師です。まだ駆け出しですが……」

お見合いかよ！つとじぶんで一人突っ込みを心でしながら自己紹介
をしてみる。

「それでシレン様」「様はつけないでいいですよ」「・・・シレン
はこの工房にどんな用事ですか？まだこの工房は再開したばかりな
ので、品物の依頼は無理かと思いますし、初対面ですよね？」

気圧されつつも疑問に思ったことを質問してみる。

売れる物といったら自分で倒した魔物の収集品と自家製の傷薬くら
いだ。

装備類はまだ作っていないので、父の作品しか在庫がない。その作
品は数も少ないしね。

「はい。初めてお会いしますけど、実は私以前からあなたの事は
知っていたのです。あなたのご両親から聞いていましたので・・・」

「」

「ガチャン」

手のひらから愛用のコップが落ちて床に破片が飛び散る。それさえ
も気付かずにシレンに詰め寄ってしまう。

「父を母を知ってるんですか！？何時会いました？まだいきてます
？どこで・・・」

「！！」

「お・落ち着いてください！。そんなに近くては話ができません

「すみません」

シユンとなりつつ椅子に座りシレンの言葉を待った。もしかしたら両親は生きているのかも！！と希望を持ちつつ。

「ふう。ちよつと驚きました。ご両親に会ったのは、こちらの時間では・・・3年前になりますね。私が精霊様の巡礼を行なつて居た時にトラブルに見舞われて、そこで通りがかったあなたのご両親に助けられたのです。そこで2・3日一緒に行動しまして。あなたの事も聞いていたのです。あなたの事を話すご両親はうれしそうに色々と言ってくれましたよ」

「残念ながらその後の事はわかりませんが、ただ自分達の身に何かあつたら息子の事を助けてくれないか？とおっしゃっていました。私たち耳長族は恩を受けた時はそれを最大限返す事を常としています。それがたとえ極力交流を持たない人でもです。風の精霊様からあなたの事を伝えられて、それで今日こうしてここにきたのです」

「そうなのですか・・・。」

もしかしたら！という気持ちが少なからず大きかったのかもしれない。

落胆の色は隠せなかったみたいだ。

「それで本当なら私がここで何か出来ればいいのですが、残念ながら私は司祭の職があり里を長期間離れることができません。ですから私の従者の一人をここに寄越そうと思つてます。その子もこの事は了承していますが、もちろんかわいいですよ？。でも何分交流が少なすぎて、あなたにご迷惑をかけるかもしれませんがその事を伝えに来たのですよ。」

「え〜っと。大変ありがたいのですが、まだこれから先の事は不透明なので……。その……。一人暮らしでもぎりぎりの生活です……。」

「援助は出来る限りしたいと思ってます。これを受け取ってください。それは我が耳長族に伝わる技法で作ったオルゴールです。これを鳴らしてもらえれば、遠くからでも会話が出来るようになりますから」

そう言つてオルゴールを俺の前に置いた。
不思議な銀色のオルゴールで、錬金術師としては構造を調べたくなつたのは仕方が無い事だと思う。

「長い時間お話ししましたが、伝えたい事はできました。従者の子は後からこちらに来ると思いますので、仲良くしてくださいね。あなたに精霊様のご加護がありますように」

そう言つて立ち上がったと思つたら姿が消えていた……。まぼろしだったのかな？と思いつつも出したコップが置いてあるのを確認する。

あ・割れたコップそのままにしてたんだ。
急いで片付けないと踏んだら痛いはず。

掃除用具を取りに店の方まで取りに行く。。。。

ドア開けてたのにお客さん誰も来ず。看板だしてないや テヘ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4234ba/>

錬金術のジェネラリスト

2012年1月12日19時00分発行